

+

2022年

1月第3・4・5週の主日礼拝説教要約

・ 1月16日：ルカ福音書 4：16-21.

「悲しき帰郷」

・ 1月23日：ルカ福音書 5：1-11.

「漁師の運命」

・ 1月30日：ヨハネ福音書 2：1-11.

「はじめての徴」

衣笠病院教会 牧師 宮原晃一郎

マタイとマルコの福音書では、イエスは悪魔の誘惑に打ち克った直後に、洗礼者ヨハネが領主に逮捕されたことを知ります。この領主が最終的にヨハネを処刑するまでに、どれほどの時間を要したかは定かではありません。

さて、イエスがヨハネと深い関係にあることをよく知る者が複数いました。さらに、両者を峻別できない者等の中には、イエスこそ、処刑されたヨハネの甦りだと主張する者まで現われます。つまりイエスは、その公生涯の始まりの段階で、すでに一度「復活者」という扱いを受けていたのです。

錯綜した情報が流れる中でガリラヤに帰還するイエスを、故郷の人々は、復活者ではない旧知の人物として迎え入れます。人々の耳には、まさにそのイエスがいつのまにか、不思議な業を行なう人物に变身しているという噂まで広まっておりました。

半信半疑、興味津々の彼らは、ナザレの町に情報網を張り、その帰還を今か今かと待ちわびています。

そこにイエスは現われます。それも母の待つ実家にではなく町のシナゴグに。そして聖書(旧約)の巻き物を開いて朗読しはじめたのです。

主の霊がわたしの上におられる。貧しい人に福音を告げ知らせるために、主が私に油を注がれたからである。主が私を遣わされたのは、捕われている人に解放を、目の見えない人に視力の回復を告げ、圧迫されている人を自由にし、主の恵みの年を告げるためである。

イエスの朗読はイザヤ書からの3箇所、さらに最後はレビ記からの引用で締め括られます。神の子が神の声で、曾て預言者に告げ知らせた言葉を自ら語る時に、イザヤの予言が今、成就したことを告げます。その威厳に満ちたイエスの声を聞いた聴衆は、暫し茫然としていましたが、気を取り直し、今度は、噂に聞いた不思議な業のうちの、何らかの徴が見たいと望みます。すると、イエスは彼らの心を見抜いて、明言します、「預言者は自分の故郷では歓迎されないものだ」。突き放された聴衆は、我に返りイエス襲いかかり、連行し、山の崖までつれて行き、彼を突き落とそうとしましたが、イエスは彼らの間を通り抜けて立ち去りました。

ガリラヤ宣教の開始後に、イエスが弟子を召集するのは、ルカの歴史記述に従った順番であり、その他の福音書とは異なるところです。ただ時系列には、人一倍こだわるのがルカ文書(福音書と使徒言行録)ですから、むしろ確実性が高い部分が多いとも考えられます。

公生涯の始まりの段階で、イエスは彼の許を訪れたニコデモというパリサイ人とも面会しています。イエスの生誕物語を除き、この人物は社会的地位や教養の持ち主で、誰よりも早く神とイエスとの深い関係を見抜いており一見、イエスの弟子となるべき理想に適った人物かと思われました。しかしイエスは彼を門前払いしつつ、水と霊とから新しく生まれる者でなければ神の国に入ることはできないことを教えます。

さて、実際にイエスの弟子となる人々は、ニコデモとは異なり、学術的な知性も社会的な地位もないに等しい者たちばかりです。しかし、ガリラヤ湖の漁師たちには誰にも負けない体力があり、イエスは彼らの方を選び、彼らは弟子たちの中核として働くことになるのです。

そんな漁師たちの代表格がシメオンです。語源はヘブライ語で「聞く」を意味する動詞からきており、短縮形はシモンとなります。あだ名のケファはヘブライ語では「岩」を意味し、ギリシャ語ではペトロとなります。因に、古代の岩文字のことを、考古学ではペトログラフと申します。

読者が慣れ親しんでいるのはあだ名で、最後のギリシャ語のペトロでしょう。ラテン語としてはピエトロと発音します。かのパチカンの、サン・ピエトロ大聖堂の名称ともなっています。カトリック教会では、このペトロが初代のローマ教皇であるといいますが、1世紀には教皇という役職はまだ存在しません。ただ、もし、万が一、ペトロがローマに行ったという伝説が正しければ、彼がそこでリーダーシップをとった可能性までは否定できません。

彼が既婚者であることは、彼の家に引き取っている姑の高熱をイエスが癒した記事が、ヨハネ以外の全ての福音書に記されていることからわかります。“ 姑が存命中 ” の既婚者ペトロの年令はおそらく20代半ばを越さない程度だと考えられます。たぶんイエスより5〜6歳ほど若かった可能性が浮上します。だとすると西暦とは事実上、イエスの年令よりもペトロの年令に近いと考えられます。伝説上60歳代で殉教した彼は、幸い漁師のままよりも、はるかに長生きをしたと考えられます。

このお話の題は「はじめての徴」でもよければ、「カナの婚礼」でも構いません。ただ、どちらも、このエピソードの本質に触れているわけではありません。誰かの足が癒されたのでもなければ、誰かの目が見えるようになったわけでもないのです。石コロからでもアブラハムの子を造られる神は、けっして石からパンをお作りになることはなさらないのです。なのに、なぜ、キリストはここで水を葡萄酒に変えられるのか。また、この整合性の欠如は問われて、しかるべきものなのか。このエピソードは始めから終わりまで謎に満ちた出来事なのです。福音書はこの出来事を最初の徴と位置付け、この後からもイエスは徴を見せ続けることを予告します。まだ見ぬ「わたしの時」も含めて。

ただ、婚礼は聖書のなかでは常に祝福に満ちているもの、人と人との最高の出会いとして、さらに神と人との理想的な関係にも譬えられるものとして描かれます。神の介入なしには絶対に成り立たぬ神秘的な宴として扱われるのです。

これを逆手にとったアメリカの映画にまだ若かったダスティ・ホフマン主演の「卒業」という作品がありました。ストーリーは、卒業後の進路が未定の若者ベンジャミンが、年上の人妻に誘惑を受け恋に陥ったあげく、その娘(エレーン)といい仲になり、彼女の周囲の者たちがこれに気が付いて、複雑化し過ぎた人間関係を解消すべく、娘に強制的にエリート of 医者 of 玉子との縁組を設定して、強引に結婚式に持ち込んだところに、ダスティ・ホフマンが演じる若者が、チャペルの入り口から大声で娘(花嫁エレーン)の名を呼び、振り向いた彼女が若者に駆け寄り二人で式場から大脱走を試みるという作品でした(エレーン役はキャサリン・ロス)。

見るものにとっては胸がすく痛快なエンディングでしたが、ふりかえると、けっしてあってはならないストーリーです。十字架の問も含めて。

ただ、それでも神は(映画の中では)脱走を試みる二人を応援しています。神が選んだ真の相手はこの二人だったとばかりに。

いずれにしても結婚とは、神の被造物である男女(etc.)が相互の神秘的な出会いを通して結ばれるもの、その一から十までが神の徴、神の業に支えられています。さらに神は、その出会いの細部に至まで、宴の葡萄酒の一滴に至まで欠乏を防ぎ、祝福の手を緩めることがありません。神が結んだものを人が勝手に解くことがないように。